



## 民芸運動の思想と 現代の手工芸

古河 幹夫

(経済学科)

6月18日、南山大学から濱田琢司先生を迎えて、民芸運動とは何を指したのか、現代の手工芸を考えるうえでどのような示唆が得られるのか、2年ゼミ生を対象に講演いただいた。「先生」と記したがまだ40歳手前の若い教員で南山大学ではオレンジ色やピンク色のTシャツで教壇に立つというモダンな感覚の先生である。

「民芸」とは「一般民衆の生活の中から生まれた、素朴で郷土色の強い実用的な工芸。民衆の工芸。大正末期、日常生活器具類に美的な価値を見出そうと、いわゆる民芸運動を興した柳宗悦の造語」である。民芸運動の主導者は彼以外にも河井寛次郎、濱田庄司、B.リーチらがいるが、柳宗悦こそは民芸運動の理論的指導者であり、彼の主張は多くの著作によって知られている。彼らは当時顧みられることのなかった、あるいは劣等なものともみなされていた民衆の日用雑器に素朴で質実剛健な「用の美」を認め称揚した。

有名な芸術家の作品と無名の職人の手になる工芸品を比べた場合、私たちは芸術家の作品により価値があるとみなし、それらのほうを美しいと感じるのが一般的である。しかし民芸運動の主導者たちはモノの美しさについて「一発逆転的な」価値の

転換を訴えた。これが当時の都市中上層の嗜好にアピールするところがあった。たとえば古くから伝統的にローカルな日用品であった「せんべい壺」は、近代化にともなう代替品の生産・普及および生活様式の変化にともない使用されなくなっていった。するとそれらはやがて「消滅」するか、素材の改良や機能の発展の努力により近代化に適合していくかどうかどちらかが順当な方向である。だが民芸運動は、それら時代遅れのモノを美的対象として「そのまま享受」する道を指し示したのである。

これは本来、主に農村部において製作された日用工芸品をその質朴さ、田舎風デザインゆえに都市中間層むけに消費意欲を喚起するという、新しい市場と新しい消費者の開拓、モノへの「新しい意味づけ」であった。地域ブランドを考察する立場からはきわめて興味深いブランド戦略としても解釈でき、この点は最後に質問があった。

モノの「新しい使用法」「新しい意味づけ」という画期的な文化解釈の提起は、しかしながら、例えば「自在掛け」というかつて農家の囲炉裏で土瓶掛けとして用いられていた」





字型の民具を、それだけ単独で取り出して都市住居のインテリアとして用いるといった、民俗資料としての価値を重要視する民俗学からすれば、いささか乱暴なモノの扱い、意味づけでもあった。この点も質問のなかで指摘があり、モノを総体として文化的脈絡において理解するのでなく、モノを一点一点であたかも室内オブジェのように趣味的価値観で再解釈することはいいのかという疑問がだされた。

濱田氏は修士論文において小鹿田焼と小石

原焼を研究対象にされたが、大分日田駅に降り立ち、そこから背負ってきたマウンテンバイクで小鹿田そして小石原へ赴いて調査したというエピソードも紹介された。車が利用できる今日でも随分と山道を行かなければならない。若いときに足と情熱で調べた研究が発点になっているようである。なお、濱田氏は上述した濱田庄司氏、益子を拠点に製陶活動を行った高名な陶芸家のお孫さんでもある。

身の回りの工芸品、その意味づけを考えさせられたひと時であった。



## 学生の利便性を考えた 図書館づくり

阿部 律子

(佐世保校附属図書館長)

大学の附属図書館は知の集積地、知の拠点であるということに異論のある人はあまりいないのではなからうか。ところが、大学進学率が50.2% (2009年) となり、同一世代の半数以上が大学に行く時代になると、大学が

学びの場であり、図書館が知の集積地であるという旧来からの考えと実態に乖離が生じていることも確かである。しかも、内容の真贋や善し悪しは別として、インターネットによってさまざまな情報を居ながらにして手軽に入手できる環境も相まって、どの大学の図書館においても、利用者の減少に歯止めがかからず、問題となっている。そのため、いかにして利用者を増やすかにどこも懸命で、試行錯誤のなか、さまざまな工夫や取り組みが行われている。

---

こうしたなか、この3月他大学の取り組みを参考にさせてもらうために、福岡にある3大学を選び出し、附属図書館を見学させてもらった。いずれの図書館でも利用者の利便性を考えた取り組みが行なわれていた。ここでそのいくつかを紹介したい。

134万冊の蔵書数が収められた九州大学附属図書館伊都図書館は、「学習と交流の場」と位置づけられ、閲覧室ばかりでなく、オープンセミナー室、グループ学習室、情報サロン室、研究個室、AVコーナーなどいずれも学生の利用のしやすさに配慮した造りであり、参考になるものも多かった。しかし、ここで驚かされたことが2つあった。まず、透明の飲料であれば、館内へのペットボトルの持ち込みが可能ということ。この措置は、禁止して学生を図書館利用から遠ざけるよりも、許可して注意を促して、マナーアップを図ることを意図している。館内には飲食コーナーもあり、透明飲料はもとより、ジュースや缶コーヒーを販売する自動販売機まで設置され、飲食用のテーブルまで置かれていた。館内への飲食物の持ち込みはどの大学の図書館でも頭を痛めているようで、4月に開催された九州地区大学図書館協議会でも協議事項にあげられていた。また、館内には携帯電話用ボックスも設置されていた。いずれも、分離しながら、取り込むという手法である。次に驚いたのは、自動書庫である。物流の部品管理から想を得て、日本の最先端のロボット工学を応用した自動書庫は、地下1階（実際は地下2階分）に収められていた。希望図書をOPACで検索し、リクエストボタンを押して本が在庫ステーションに届くまで、わずか2分という、驚異的なシステムである。蔵書数の増加と狭隘化の問題を抱える図書館にとっては、予算が許せば、建て替えや増設の際の一つの選択肢となるのではなかろうか。この自動書庫は未来の図書館を思わせた。

次に訪れたのは西南学院大学図書館である。

ここでも滞在型の図書館を目指し、土曜日はもちろんのこと、日曜日でも午後から開館している。特に印象に残ったのは、学生の利便性を考えて、一般図書ばかりでなく、就職関係の書籍や資格試験の問題集などが館内に置かれていたことである。関係部署が閉まっている時間帯でも図書館に来れば利用できる。そのためか、週末の図書館利用者も数百人と多く、図書館が学生にとって身近な存在であることをうかがわせた。

最後は、九州産業大学図書館である。ここでは、1階のフロアにその年度の全科目のテキストと指定図書が置かれていた。どのような科目が開講され、どのようなテキストが使用されているのか一目で分かり、履修生ばかりでなく、その他の学生にとっても参考になるのではないかと思われた。新聞も数紙が数カ月分同じ棚に整理され、関連記事を探すのに便利である。また、ここでも、飲食コーナーが館内に設けられていた。

さまざまな情報が怒濤のごとく押し寄せる現代社会においては、情報の賢明な選択が求められる。そうでなければ、間違った情報に踊らされることになる。正しい情報を得るためには、情報の「目利き」でなければならない。情報の「目利き」であるため、つまり情報の真贋の区別をつけることができるようになるためには、良質な情報をまず知っていることが前提となる。そして、図書館こそがこの良質な情報を最も多く提供する場であるし、そうした認識を学生のみならずにも共有してもらいたい。

これからも、他大学の図書館の取り組みなども参考にしながら、よりよい図書館づくりを目指してゆきたい。

最後に、3大学の図書館の方々には大変お世話になった。心からお礼を申し上げたい。

# 本と心

河内 千波  
(地域政策学科2年)

とある本屋の看板に「本は心のご飯です」という言葉が書かれているのをご存知でしょうか。人間に限らず全ての生命は栄養を摂取しなければ生きてはいけない、というのは誰もが知っていることですが、この一文は、同じように我々人間が持つ心にも栄養が必要だということを示しています。

私が本を読み始めたのはいつのことだったか、幼稚園に通うようになった頃には既に、家にあった大量の絵本を手に取り、自分ひとりで必死に絵と文字を追っていたような記憶があります。ページいっぱい広がる夢と冒険と不思議の詰まった未知の世界に、私は一体何度心を奪われたか分かりません。あの頃から私は、自分が知らなかった、分からなかった、想像もしなかったことを教えてくれる本がとても好きでした。

本はたくさんのことを教えてくれます。文献や資料は莫大な知識や研究成果を、物語は感情の表わし方や心の持ちよう、考え方といったことなど、授業では教えてもらえないものなど様々です。また、本を読めば、単語や漢字、言いまわしなど、言語に関する知識もおのずと身につけていきます。語彙力はあつて邪魔なものではありません。たくさん言葉を知っていればその分多様な話し方ができますから、社会に出てから大いに役立てることができるのです。

このように、私も本から多くのことを学んでいるわけですが、私の場合は特に、感情の動きや考え方といった内面的な成長が大きいように思います。ファンタジーやノンフィクションというようにジャンルは様々ですが、私が専ら読んでいたのは物語でした。現実とは違う世界への憧れもあったのだと思います

が、それ以上に、物語の中で描かれる登場人物たちの葛藤する姿や、悩みながらも歩いていく様子を自分と重ね、共に成長しようとしていたのだと思います。空想の世界にうつつを抜かして、と笑う人がいるかもしれませんが。確かに現実とはかけ離れた内容の作品も数多く存在します。しかし、たとえ空想の産物であったとしても、その中から学び取ることができるものがあることもまた事実なのです。物語によっては虚無感や絶望感に苛まれることもあります。それはそれで何らかの肥やしになって自分の中で生きていくはず。私は私自身、とても豊かな感受性を持っていると思っています。もちろん遺伝的なものや身近な人間関係も関与しているのですが、それだけでなく、幼い頃から本を読んできたことも一つの大きな要因だと考えています。悲しいこと、嬉しいこと、辛いこと、楽しいこと、憎らしいこと、幸せなこと。本の中に散りばめられたたくさんの感情を拾い、自分の中に取り込んで喜怒哀楽を登場人物と共にする、つまり感情移入することで豊かな感受性を育ててきたのです。

本は心のご飯です。たくさん読んでたくさん栄養を摂取しなければなりません。栄養は私たちの体を構成する大切な細胞の一つとなり、人生をより豊かにしてくれます。行き詰った時、悩み疲れたとき、新しいなにかが欲しいとき、時間が余ったとき、目についた本を手にとってみてください。きっとあなたの中に、新鮮な風を吹き込んでくれるはずですよ。



# 私たちの図書館

兒玉里穂  
吉田菜美  
(地域政策学科2年)

大学入学まで、私の図書館の利用頻度は、決して多くはありませんでした。図書館を利用するとしても、それは与えられた勉強のためでした。読書が嫌いであったわけではなく、ただ自ら積極的に図書館に行って本を借りようという強い意志がありませんでした。しかし、大学2年になった現在では、改めて本や図書館の有用性を感じています。

その契機となったのは、去年の春のことです。長崎県立大学に入学後、はじめて大学図書館に行ったとき、本の多さ、インターネットコーナー、AVコーナー、CD-ROMコーナー、雑誌コーナーなどの充実した設備を目のあたりにして、驚きを隠しきれませんでした。そして、何よりも過ごしやすい雰囲気、そこにいっただけで落ち着き、いろいろと想像力を膨らませることができるような、そんな空間であったことを実感しました。それからというもの、私は講義で必要な資料を図書館で

探し、様々な本を読み、授業の合間に図書館を利用するようになりました。長崎県立大学の図書館との出会いが、本の素晴らしさ、図書館という空間の心地よさや可能性に気づかせてくれました。これからも大学図書館を大いに利用するつもりです。(兒玉)

大学に入学したばかりの頃、大学図書館を利用することはほとんどありませんでした。大学図書館は堅苦しく敷居が高いというイメージをもっていました。そんな私が大学図書館を利用するようになったのは、講義で課されたレポートの参考文献を探しに行ったことがきっかけです。大学図書館は、最初のイメージとは異なりました。図書館の入口にはベストセラー、流行りのCD・DVDなどが並び、司書の方の対応もよく、利用しやすい雰囲気でした。その後、大学図書館の利用回数が増え、それに連れ、大学図書館の魅力を深く感じるようになりました。

図書館の1階には新聞、3階には雑誌が並び、日々変化する社会をいち早くとらえることができます。地域政策学科に所属していることもあり、政治経済に関わる情報収集にも図書館をよく利用します。開館時間は平日8:30から22:00、土曜日9:00から17:00となっており、講義後やサークル後に利用可能で、夜までレポートや勉強をすることもできます。大学図書館は、私たち学生のニーズを第一に考えてくれる欠かせない施設であり、さらに私たちの大学生活を豊かにしてくれる存在だと思います。(吉田)



右：兒玉さん、中央：吉田さん  
左：お二人の友人辻君



## 本棚の前に 座っていた頃

水野倫理

(経済学科)

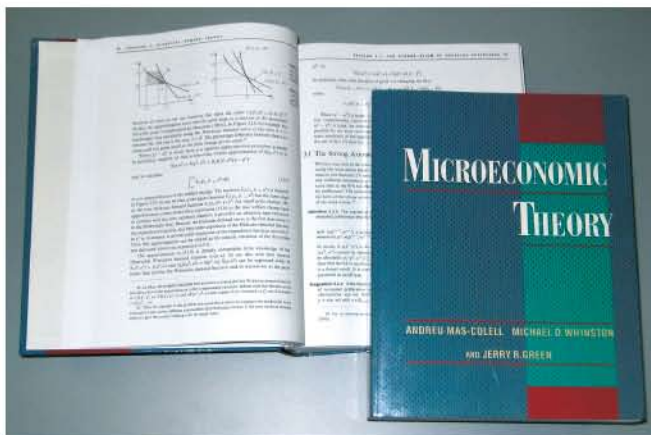
文章を読むことがあまり好きでない私にとって、図書館に関連する思い出は数えるくらいしかありません。言い換えると、学生だった頃の私はあまり勉強熱心でなかったのだと思います。そのため大学院に入学するまで、可能な限り本を読まずに過ごしてきました。それにも関わらず、学部生だった私は就職活動をせずに、何となく大学院に進学しました。大学院に進学した理由などは、現在になって振り返っても思い出せませんが、大学院に入学して多数の文献を読まなければならなくなった心理的な衝撃は今でも忘れられないものがあります。

大学院に入学してから、最初に私を苦しめたのは英語で書かれた教科書でした。特に、必須科目であるミクロ経済学の教科書が1000ページほどの分厚い辞書のようなものであることを知ったときは、絶望という文字が頭の中でフワフワ浮かんでくる気分でした。その教科書は、Mas-Colell, Whinston, and Green (1995) *Microeconomic Theory* です。ミクロ経済学は必須科目であるので、この教科書のある程度理解しないことは留年を意味します。当時の私は留年という重い響きを心の中に引きずりながら教科書を購入し、それをパラパラめくりました。そのときの私の感想は「数式がぎっしり書いている紙の塊」といったものでしたが、現実逃避をするわけにもいかないのです。この本の内容を一つずつ理解していく以外の選択肢はありませんでした。学術的な知識をまったく持っていなかった私にとって、この本だけで勉強していくことは不可能で

あったので、他の本を参照しながらこの本を読んでいくことにしました。このときから、私は図書館に頻繁に通うようになります。

大学院に入学したばかりの頃は、私は数学的知識をほとんど持っていませんでしたし、英語を読むスピードもかなり遅かったので、教科書を1ページ読むのに数時間必要でした。特に、教科書に書かれている数学的概念は日本語の本で読んでも分からないことが多く、数学的概念の説明を読むために別の数学の本を読むという作業を繰り返していました。そのため、一日に何冊も数学の本を借りることになるので、図書館と研究室を往復する時間があったいと感じていました。そこで当時の私が選んだ勉強方法は、図書館が開館したら数学関連の本棚の前の床に直に座り、そこで勉強するという方法でした。数学の本棚は空調のあまり効いていない書庫の中にあつたので、夏は汗が流れるほど暑く、冬は息が白くなるほど寒かったのを覚えています。そのような生活を一年間続けることで、なんとか授業についていけました。

今では、ミクロ経済学の授業で読んだ教科書は使い込まれた辞書のように汚れています。当時の私がこの教科書に書いたメモは間違っていることも多いのですが、読み返すと図書館の本棚の前に座っていた頃を思い出す日記のようなものになっており、私にとって大切なものとなっています。



## 図書館の楽しみ

畑田 和佳奈

(地域政策学科)

学生の皆さんは、こういったときに図書館を利用されているでしょうか。レポートや卒論作成、講義の予習復習のための資料収集が本来的でしょうか、静かで落ち着いた環境ですから、定期試験や公務員試験準備、講義の予習復習などの学習スペースとしての利用も一般的ですね。レポートや卒論作成のための「資料収集」に関して言えば、この頃は図書館と同じくらい、あるいは図書館よりも多くの時間を情報処理演習室（インターネット接続のコンピュータを利用できる教室）で過ごす学生も増えているかもしれません。

多くの図書が所蔵される図書館には、情報収集に関して、こういった特質があるのでしょうか。利用者個人によって、あるいは、学生、教員、図書館職員など、各々の立場によっても図書館に見出す意義は異なると思いますが、今回は私の経験から、図書館ならではの楽しみ(?)の一つをご提案したいと思います。

私の研究領域は「行政学」で、特に、行政に民意を反映するための理論や取り組みを考えています。行政を市民に近いものにしていくということに関しては、近年理論も実践も進展が著しく、「市民自身による公益創出（市民による行政）」の取り組みも進んでいます。この点、大変興味深いのが、同じく行政を対象とする「行政法」の理論動向です。高層マンションの建築を例にとると、従来行政法では、建築基準法に違反するマンション建築の「不許可」のような、いわゆる「処分（法律行為）」を題材に、許可しない行政機関と不許可処分を受ける事業者との間の二者関係を議論の対象としていました。しかし近年では、「処分」そのものの検討に加え、その処分に至る過程（処分基準の決め方、処分に必要な情報の集め方、処分までの指導の仕方など）

も行政法の議論対象となっています。また、当事者についても、①マンションを建てたい「事業者」、②建築許可権限を持つ「行政」に加え、③高層マンションを建てさせたくない「近隣住民」まで含めた三者関係が議論されています。行政法の理論動向にも、住みやすいまちを誰が創り守っていくか（地域行政のプロセスや担い手）についての認識の変化が伺えますね。

前置きが長くなりましたが、ご提案というのは、図書館での資料収集の合間に、本来とは少し視点の異なる議論・情報との出会いを求めてみてはどうでしょうかということです。昔ながらの風情を残す町並みを卒論の題材に選び、町並みが形成された歴史や、各町家に共通する構造や特性を調べる場合を考えてみましょう。まずは、図書館にある町家の歴史（建築史）や文化・自然環境・地理的状况・暮らしと町家との関わりなどに関する図書を読み、その意義を検討するでしょう。

そうした調査や考察の合間に一息抜きとして一図書館内を散歩して、本来の視点とは異なる領域の図書や学術雑誌を気ままに10冊ほど抜き出して机に積み、ぱらぱらとめくってみてはどうでしょうか。例えば、憲法や民法、行政法の関連図書からは次のような疑問が浮かぶかもしれません。昔ながらの町並みを守るため、旧来からの住民間で町並み保全についての「約束事」を決めておいて、新規住民にも旧来の町並みに合う家屋の建設を求めること（「約束事」を守らせること）はできるのか。近代的な住宅を建築した新規住民に対し、旧住民が「昔ながらの町並みを楽しむ権利を阻害された」と主張することはできるのか。そもそも「昔ながらの町並みを楽しむこと」は個人の権利に含まれるのか…。

これら全てを卒論に書いてしまったら「視点がぶれている」という評価は免れませんが、多くの専門書を前にあれこれと空想を広げることができるのは、大学図書館ならではの楽しみといえるのではないのでしょうか。

## 新任職員のあいさつ



安恒基子

今年度より図書館で勤務しております。これまで、公共図書館などの勤務経験はあるのですが、大学図書館は初めての勤務となり、慣れるまで何かとご迷惑をおかけすると思いますが、みなさんと共に、明るく親しみやすい図書館をつくっていきたいと考えております。どうぞよろしくお願い致します。

## 平成22年度学生による選書ツアーを開催しました!



今年度の選書ツアーは、平成22年6月4日(金)に紀伊國屋書店福岡本店で開催しました。開学記念日ということもあり参加者も多く、学生16名、教職員4名の20名で、興味

のある本を実際に手にとって選書してきました。

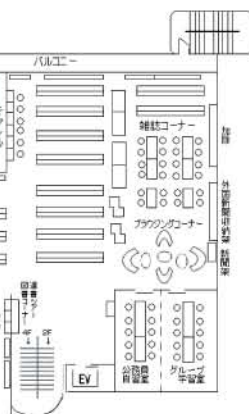
今回選書した本は、図書館3階の選書ツアー選定図書コーナーに配架される予定です。

## 附属図書館からのInformation

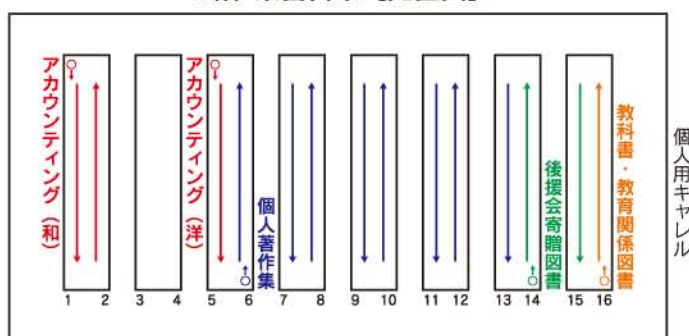
### 配架場所 変更のお知らせ

3階アカウンティング図書・個人の著作集  
4階教科書・後援会寄贈図書は、  
3階集密書架へ移動しました。

棚番1～5 アカウンティング図書  
棚番6～13 個人の著作集  
棚番14～16 教科書・後援会寄贈図書



3階 集密書架【配置図】



◆附属図書館HPアドレス <http://sun.ac.jp/lib>

- 当館は本学学生以外の方でも県内にお住まいの15歳以上の方は利用できます。
- 開館時間／平 日：午前8時30分～午後10時まで（学生の休業期間中は午前9時～午後5時まで）  
土曜日：午前9時～午後5時まで  
休館日：日曜日・祝祭日・開学記念日（6/4）

編集責任／長崎県立大学経済学部取書委員会 発行所／長崎県立大学佐世保校附属図書館 発行日／2010年7月30日